

ギネス世界記録への挑戦と都市文化実践の多様性

－八尾市と中野区の盆踊りを事例として－

永野 篤

(キャリア開発総合学科)

I. 問題と目的

近年、日本各地において、盆踊りや民踊を対象としたギネス世界記録への挑戦^{注1}が見られるようになってきている。これらの取り組みは、参加人数や同時性といった数量的指標を通じて、地域文化を可視化する手段として注目を集めてきた。一見すると、こうしたギネス世界記録への挑戦は自治体主導のイベントとして理解されやすく、地域振興や観光施策の一環として捉えられることが多い。

しかし、これまでに実施された事例を俯瞰すると、ギネス世界記録への挑戦は必ずしも一様な性格を持つものではなく、その成立過程、主体、文化的意味づけには大きな差異が存在することが分かる。同じ「ギネス世界記録への挑戦」という枠組みのもとであっても、既存の地域文化を基盤として拡大を図る事例と、個人の問題意識や創造的实践を起点として再構成される事例とでは、その社会的意味は大きく異なる。

本研究の目的は、複数都市の取り組みを比較することにより、ギネス世界記録への挑戦が各都市においてどのような文化的意味を持ち、いかなる都市アイデンティティやシビック・プライド^{注2}を具現化しているのかを明らかにすることである。あわせて、ギネス世界記録という枠組みが、都市文化実践をどのように可視化し、また再編成し得るのかについて検討する。

II. 方法

1. 対象

盆踊りを対象としてギネス世界記録への挑戦が行われた主な事例はいくつか報告されている(表1)。本研究では、この中から、近年に実施され、かつ異なる性格を有する事例を取り上げる。具体的には、2017年に記録を達成した八尾市の事例と、2023年および2024年に挑戦したものの記録更新には至らなかった中野区の実例を主な分析対象とする。達成と未達という異なる帰結を示した二つの事例に着目し、両者の文化実践の成立過程およびその意味の違いについて比較検討を行う。

両事例はいずれも比較的近年に実施されており、資料収集および関係者への聞き取りが

表1. 盆踊りをめぐるギネス世界記録への主な挑戦(条件別記録を含む)

年	地域	帰結	人数	カテゴリー・特徴
2015	大阪・道頓堀	達成	2,025	伝統性説明を要請／商店街主導
2016	東京・八王子	達成	2,130	新八王子音頭／祭り実行委
2017	宮崎・延岡	達成	2,748	新ばんば踊り／地方都市
2017	大阪・八尾	達成	2,872	河内音頭・costumed(衣装統一)
2023	東京・中野(1回目)	未達	2,866	都市型盆踊り／更新型実践
2024	東京・中野(2回目)	未達	2,453	国籍数カテゴリ追加／Bon Jovi要素
2025	大阪・関西万博	達成	3,946	non-costumed／62か国参加

可能であった。とりわけ八尾市は、盆踊りを対象としたギネス世界記録の現在の記録保持者であり、取り組みが一定の時間を経て都市文化として定着している事例である。一方、中野区は、現在進行形で実践が継続されている当事者的事例であり、未達成を含めた試行錯誤の過程を観察可能であった。このように、本研究は同時代的かつ対照的な文化実践を比較可能である点を重視して事例を選定した。

2. 調査時期

本研究で扱う資料収集および調査は、2025年2月から2026年1月にかけて実施した。八尾市の事例については、2017年のギネス世界記録達成以降の関連資料および聞き取り内容に加え、街に点在する文化的伝統の痕跡について取材を行った。中野区の実例については、2023年および2024年に実施されたギネス世界記録への挑戦を対象として、継続的に情報収集を行った。

3. 手続き

本研究では、盆踊りをめぐるギネス世界記録への挑戦事例について、文献調査および資料整理を中心に分析を行った。具体的には、ギネス世界記録に関する公式記録、報道記事、自治体や関係団体が公開しているウェブサイトおよび映像資料等を収集し、各事例の実施背景、運営形態、帰結について整理した。

あわせて、八尾市および中野区に関わる関係者から得られた聞き取り内容を参照し、公式資料からは把握しにくい実践の経緯や位置づけについて補足的に整理を行った。これらの資料を基に、事例ごとに文化実践の特徴を記述した上で、達成と未達という異なる帰結を示した二つの事例について比較検討を行った。

4. 倫理的配慮

本研究において扱う事例および資料は、主として公開されている文献、報道資料、公式ウェブサイト、映像コンテンツ等に基づいている。調査の過程で言及する人物については、社会的に公知の立場にあり、パブリックな場での発言や活動の記録が公開されている場合に限り、実名または固有名詞を用いている。

また、聞き取りによって得られた情報については、上記の場合を除き、個人が特定されないよう内容を整理し、発言の趣旨を損なわない範囲で表現を一般化した。研究の目的は、特定の個人を評価・批判することではなく、文化実践および都市における取り組みの構造や意味を明らかにすることにある。この点に留意し、研究倫理に配慮した記述を行った。

Ⅲ. 結果

1. 八尾市における事例

八尾市におけるギネス世界記録への挑戦は、河内音頭を中心とした地域文化を基盤として展開された事例である。八尾市では、長年にわたり地域に根付いてきた盆踊り文化が継承されており、ギネス世界記録への挑戦は、その延長線上で構想された。

2017年に実施された本事例は、八尾河内音頭まつりの開催40周年という節目の年に位置づけられていた。行政、文化関係者、地域住民が実行委員会形式で関与し、従来の河内音頭の所作や進行を基本的に維持したまま、参加規模を拡大する形で記録達成を目指した。結果として、当該年においてギネス世界記録が達成された。

本事例では、ギネス世界記録への挑戦にあたり、新たな演出や形式の導入は行われず、既存の文化実践を前提とした運営がなされていた。河内音頭を核とする踊りの所作や進行

が共有されており、参加者の衣装や動作は一定の統一性を保っていた。

また、運営主体の構成にも特徴が見られる。八尾市では、行政、文化関係者、地域住民が実行委員会形式で関与しており、市長個人が前面に出て本事例を語る場面は限定的であった。河内音頭や祭りそのものが主語として語られる場面が多く、行政や首長は主として背景的な役割を担っていた。

2. 中野区における事例

中野区におけるギネス世界記録への挑戦は、特定の個人の問題意識と実践を起点として展開された事例である。本事例では、プロの民謡・舞踊家として活動する一人の人物^{注3}が中心となり、既存の盆踊り大会の形式を見直す形で実践が進められてきた。

当該人物は、呉服関連の仕事を含む複数の職を経験する中で、幼少期から親しんできた踊り、とりわけ母親が関わっていた盆踊りに改めて向き合うようになった。中野区の盆踊り大会に参加する過程で、従来の進行や構成に対する問題意識を持ち、参加者の反応や場の状況を踏まえながら、踊りや進行の再構成を行っていった。また、東京2020オリンピック閉会式における盆踊りの披露においても中心的な役割を担った。

中野区の実践では、イベント進行上の余白の時間に、DJによって世界的に知られるロックミュージシャンであるボン・ジョヴィの楽曲が流されたことがあった。これを契機として、参加者の反応を伴いながら新たな踊り方が生まれ、いわゆる「盆ジョヴィ」と呼ばれる要素が形成されていった。ボン・ジョヴィの楽曲が流された場面は、計画的な演出というよりも、現場の進行上の余白から生じたものであった。この偶発的出来事が参加者の反応を通じて定着していった点は、中野区の実

践が即興性と更新性を内包した都市文化実践であることを象徴している。

2023年に実施されたギネス世界記録への挑戦は、同年に閉館を迎えた中野サンプラザと時期を同じくして行われた。参加人数は記録要件に達せず、結果として未達となった。続く2024年の挑戦においても、ギネス世界記録の更新には至らなかったが、この際には参加者の国籍数といった指標も考慮した運営が行われていた。

中野区の事例では、行政と首長の関与のあり方にも特徴が見られる。行政職員は本事例について、区は後援の立場にとどまると説明している。一方で、区長はYouTube等を通じた発信に協力的であり、対外的には広報的な関与が可視化されていた。

なお、本稿における首長への言及は、特定の人物評価を目的とするものではなく、文化実践がどの主体によって象徴的に語られるのかという構造の差異を比較するための分析視点として位置づけている。

IV. 考察

八尾市と中野区の事例は、いずれも盆踊りを通じてギネス世界記録への挑戦が行われた点で共通しているが、その成立過程および社会的意味には明確な差異が見られる。達成と未達という結果そのものではなく、文化実践の性格としては八尾市と中野区ではそれぞれ「継承」と「更新」が、主体構造としては「コミュニティ」と「個人」といった異なる傾向が見いだされた。これらの差異を、都市におけるシビック・プライドの表象のされ方という観点から考察する。

1. 八尾市

八尾市における文化実践の方向性としては、「継承」性が根幹に位置づけられる。八

尾市では、河内音頭という地域固有の文化が明確な核として存在しており、ギネス世界記録への挑戦は、その枠組みを変えずに参加規模を拡大することで達成された。ここでは、文化はすでに完成度の高いものとして共有されており、ギネス記録はその厚みを数量的に可視化する装置として機能している。

また、主体構造については、八尾市では行政、文化関係者、地域住民が実行委員会形式で関与し、特定の個人が前面に出ることなく、文化そのものが主体として語られていることが確認された。あわせて、市民においてもギネス記録が誇りとして大切にされていることが、取材から明らかになった^(図1)。この主体構造の特徴は、首長の関与のされ方にも表れている。八尾市においては、少なくとも過去20年間にわたり、市長はいずれも八尾市出身者が務めてきた^{注4}。そのため、市長個人が文化実践の前面に立って語られる場面は少なく、河内音頭や祭礼そのものが都市を代表する主体として位置づけられる傾向が見られる。これは、地域文化が都市の内部に深く内在化している状態を示していると解釈できる。



図1. ギネスの記録を誇らしく思う市民

2. 中野区

中野区の事例では、特定の個人の問題意識と創造的実践を起点として、「更新」された盆踊りとして再構成されてきた。即興性や外来要素を積極的に取り込みながら展開された中野区の盆踊りは、伝統文化の再現というよりも、都市空間における表現活動としての性格を強めている。このような実践の性格は、2023年に中野サンプラザの閉館時期に合わせて開催されたギネス世界記録への挑戦や、翌年に再挑戦が行われたこと、さらには多国籍という新たなカテゴリーを導入した2024年の試みにも表れている。これらの連続的な挑戦は、個人の問題意識と裁量に基づく柔軟な実践であったからこそ可能であったと考えられる。仮に行政主導の取り組みであった場合には、費用負担や事業計画の制約から、同様の試みを短期間に繰り返し実施することは困難であった可能性が高い。

主体構造としては、中野区では行政は制度的には後援の立場にとどまると説明されるものの、実際の実践は個人の裁量や判断に大きく依存しており、象徴的主体が明確に可視化されている。その一方、過去20年間、区長はいずれも中野区出身者ではなく、地域外から就任している。このことも影響してか、行政内部では後援的立場が強調される一方で、対外的な広報や発信においては区長個人が主体として前面に出る傾向が見られる。制度的関与と象徴的可視性とのあいだに生じているこのねじれは、中野区における文化実践が、街の物語としてではなく、個人や首長の象徴性によって語られやすい構造を持っていることを示唆している。

以上の考察から、ギネス世界記録への挑戦は、単なる数量的競争ではなく、各都市における文化のあり方や、誰が都市を代表して語るのかという問題を可視化する契機となつて

いることが分かる。八尾市では、継承された地域文化が都市そのものを代表し、中野区では、更新され続ける実践と象徴的主体が都市像を形づくっている。

V. 総合考察

本研究で検討してきた八尾市および中野区の事例は、いずれも盆踊りを媒介としてギネス世界記録への挑戦が行われた点で共通しているが、その成果の定着の仕方や都市への埋め込まれ方には大きな違いが見られる。本章では、前章の比較考察を踏まえ、八尾市および中野区の実例が、都市空間の中でどのように定着し、意味づけられていくのかを総合的に検討する。とりわけ、記録の達成・未達そのものではなく、記録が都市空間や歴史的文脈の中にいかに組み込まれ、意味づけられていくのかという点に焦点を当てる。

八尾市においては、2017年のギネス世界記録達成が一過性の出来事として消費されるのではなく、都市空間の中に痕跡として残されている点特徴的である。記録達成を記念した公園に掲げられた写真^(図2)、記録達成以前より市役所前に設置されている河内音頭を踊る女性の銅像^(図3)、商店街に掲げられた垂れ幕^(図4)、さらには織物産業の歴史を示すマンホール^(図5)など、複数の物理的・視覚的要素が街の各所に配置されている。これらは、ギネス世界記録の達成以前から、都市の歴史と文化が日常風景の中に埋め込まれ、自明の存在として共有されてきた記憶を、あらためて可視化する役割を果たしている。

このような視覚的痕跡の蓄積は、八尾市におけるギネス世界記録達成が、特定の個人や一時的なイベントに回収されるのではなく、「八尾という都市そのもの」の実績として再解釈されていることを示している。すなわち、ギネス世界記録は、河内音頭や織物産業と

いった既存の地域文化と接続されることによって、都市のアイデンティティの一部として定着しているのである。

一方、中野区の実例では、ギネス世界記録への挑戦は、都市空間に物理的な痕跡として



図2. 近鉄八尾駅近くの公園



図3. 八尾市役所前の銅像



図4. 商店街の垂れ幕



図5. 伝統を示すマンホールのデザイン

固定化される段階には至っていない。しかしその一方で、盆踊りの形式や意味を更新し続ける実践として、都市文化に動的な影響を与えている。中野区における取り組みは、結果として記録達成には至らなかったものの、都市における表現活動の可能性を拡張し、盆踊りを「再生産される文化」として提示した点に意義がある。

八尾市と中野区の差異は、盆踊りが行われる「場所」が持つ歴史的背景にも表れている。八尾市の盆踊り会場である久宝寺緑地は、戦時中には防空緑地として利用されていたが、その名称は、聖徳太子が創建したと伝えられる久宝寺に由来している。その周辺には、聖徳太子と物部守屋の対立に象徴される古代以来の宗教的・政治的緊張の歴史が重層的に刻まれている。こうした長い歴史の蓄積の上に、河内音頭や盆踊りの文化が位置づけられてきたことは、八尾市における文化実践が「すでにそこにあるもの」として自然に受け継がれていることを示している。

これに対し、中野区の盆踊り会場である中野セントラルパークおよび四季の森公園に隣接する車道一帯は、生類憐みの令による犬小屋の設置、陸軍中野学校、戦後の中野警察大学校といった近代以降の国家的制度の記憶を経て、再開発によって形成された都市空間である。幅の広い車道という、本来は交通機能を担う空間が、盆踊りの場として一時的に転用される点は、この地域における文化実践が、固定された祝祭空間ではなく、都市機能の再解釈として成立していることを象徴している。この場所の変遷は、断絶と更新を繰り返す都市の歴史そのものであり、そこで展開される盆踊りが、伝統の再現よりも再構成や更新の色彩を強める背景の一つであると考えられる。

さらに視野を広げると、2025年に開催さ

れた大阪・関西万博において、従来の衣装条件を外しつつ、国籍数を含めた新たな条件のもとで盆踊りの世界記録が達成されたことは、重要な示唆を与えている。この事例は、特定の都市に依拠しない大規模イベントによって記録が更新され得ることを示した一方で、都市に根差した文化実践としてのギネス記録とは性格を異にしている。報道においては、既存の記録が「塗り替えられた」かのような印象が強調されがちであったが、ギネス世界記録の制度上は、条件の異なる記録として併存している。

このことは、ギネス世界記録が都市のシビック・プライドに与える影響が、記録そのものの達成以上に、その後いかに都市の文脈に組み込まれるかによって左右されることを示している。八尾市のように記録が都市空間に痕跡として定着する場合、ギネス世界記録は長期的な都市アイデンティティの資源となり得る。一方で、中野区のように更新型の実践として展開される場合には、達成の有無にかかわらず、都市文化の可塑性や開放性を示す象徴として機能する。

以上より、ギネス世界記録への挑戦は、単なる「世界一」の獲得競争ではなく、都市が自らの文化をどのように語り、記憶し、次世代へと継承していくのかを問う実践であると同時に、都市アイデンティティの具現化であると結論づけられる。八尾市と中野区の対比は、シビック・プライドが静的に保存されるものと、動的に更新され続けるものという、二つの異なるあり方を具体的に示している。

VI. まとめと今後の課題

本研究では、盆踊りを媒介としたギネス世界記録への挑戦を手がかりに、八尾市および中野区という二つの都市事例を比較し、都市における文化実践の性格と主体構造の違いを

整理した。さらに、都市機能の再解釈や表現活動としての盆踊りを通じて、文化の可塑性や開放性が示される実践であることを明らかにした。

今後の課題として第一に挙げられるのは、2025年に開催された大阪・関西万博以降の変化を継続的に検討することである。万博においては、特定の都市に依拠しない形で盆踊りの世界記録が達成され、報道上は既存の記録が「更新された」かのように受け取られた。しかし、ギネス世界記録の制度上は条件の異なる記録として併存しており、この出来事が八尾市や中野区のシビック・プライドや文化実践にどのような影響を与えていくのかについては、今後の検討を要する。万博後における両都市の語りや実践の変化を追跡することは、都市における記録と記憶の関係を理解する上で重要な視点となる。

第二に、万博を含めた各地の地方都市における文化実践や都市イベントについて、継続的に取材を行うことが課題として挙げられる。複数の都市事例を横断的に比較することで、ギネス世界記録や大規模イベントが、都市の規模や歴史、文化資源の違いによって、どのように受容・再解釈されるのかが、より明確になるであろう。

以上のように、ギネス世界記録への挑戦は、単発のイベントや成果の評価にとどまらず、都市が自らの文化をどのように位置づけ、語り、継承していくのかを考えるための有効な分析対象である。本研究で得られた知見は、今後の都市文化研究やシビック・プライド研究に対しても、一定の示唆を与えるものと考えられる。

Ⅶ. 注釈・文献

注1) Guinness (ギネス世界記録) について

Guinness World Records (ギネス世界記録) は、世界記録を認定するしくみであると同時に、強いブランド力を持つ存在である。Guinness World Records Ltd はイギリスに本社を置く組織であり、日本では Guinness World Records Japan 株式会社 (ギネスワールドレコーズジャパン株式会社) として2010年に設立された。一般に「世界一」という表現は多様に存在するが、その中でも「ギネス」という名称は、世界記録の代名詞として広く認知されており、マーケティングの観点から見ても極めて高いマインドシェアを獲得している。

ギネス世界記録は、単なる記録認定機関ではなく、「世界一であること」を可視化し、物語化する装置として機能している。記録は厳密な条件設定のもとで分類され、条件が異なれば別の記録として併存する仕組みが採られている。このため、記録が更新された場合であっても、過去の記録が否定されるわけではなく、条件ごとに異なる価値が保持される。

近年、自治体やイベントにおいてギネス世界記録への挑戦が増加している背景には、このブランド力の高さがあると考えられる。“ギネス”という名称を用いることで、達成の有無にかかわらず、取り組み自体がニュース性を帯び、広範な注目を集めやすくなる。すなわち、ギネス世界記録への挑戦は結果のみならず、挑戦の過程や語られ方を含めて社会的に消費される構造を持っている。

本研究では、ギネス世界記録を単なる数量的競争の場としてではなく、地域文化や都市の価値を外部に提示するための枠組み、すなわち文化実践を一時的に「世界基準」へと翻訳する媒介として位置づける。

注2) Civic Pride (シビック・プライド)

Civic Pride (シビック・プライド) とは、都市や地域に対して住民が抱く誇りや愛着を指す概念であり、社会学や都市研究の分野において、地域アイデンティティや市民意識を論じる文脈の中で用いられてきた。とりわけ都市再生やコミュニティ形成に関する議論と結びつきながら発展してきた概念である。

一方で近年では、Civic Pride という語は理論的定義や背景が十分に説明されないまま、

説明不要の前提概念として用いられる場面も増えている。学術論文や政策文書、報道においても、その意味内容が自明視され、操作的定義を伴わずに使用される例が少なくない。

さらに日本においては、Civic Pride が学術概念にとどまらず、メディアやマーケティングの文脈で活用されている点も特徴的である。例えば、読売新聞社は「Civic Pride」を登録商標として保有しており、地域ブランドや都市評価に関する企画の中で用いている。ここでは Civic Pride は、地域の魅力を可視化し、評価や消費へと接続するためのフレーズとして機能している。

本研究では、Civic Pride を固定的な心理状態や単純に数値化可能な指標としてではなく、文化実践や出来事を通じて生成・再編成される関係的な分析概念として捉える立場をとる。盆踊りやギネス世界記録への挑戦は、Civic Pride が形成され、更新される具体的な実践の場として位置づけられる。

注3) 鳳蝶 美成（あげはびじょう）について

鳳蝶 美成（あげはびじょう）は、日本民謡鳳蝶流の家元であり、民謡・舞踊を中心に幅広く活動する舞踊家である。幼少期より踊りに親しみ、伝統的な民謡に加え、現代的な音楽や都市的な表現を取り入れた独自の実践を展開している。中野区における盆踊りの再構成やギネス世界記録への挑戦においては、中心的な企画・実践者として関与してきた。

同氏の活動内容や経歴については、本人が運営する公式ウェブサイトにおいて公開されている。

（鳳蝶流公式サイト：<https://ageharyu.com/about/>（最終閲覧日：2026年1月11日））

注4) 筆者による公開資料および聞き取り調査に基づく。中野区も同様である。

Guinness World Records. Guinness World Records Official Website.

<https://www.guinnessworldrecords.com/>

（最終閲覧日：2026年1月11日）

読売新聞社. Civic Pride プロジェクト公式サイト.

<https://civic-pride.com/>

（最終閲覧日：2026年1月11日）

中野区. 中野区公式ウェブサイト.

<https://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/>

（最終閲覧日：2026年1月11日）

八尾市. 八尾市公式ウェブサイト.

<https://www.city.yao.osaka.jp/>

（最終閲覧日：2026年1月11日）

大阪・関西万博公式サイト. 2025年日本国際博覧会.

<https://www.expo2025.or.jp/>

（最終閲覧日：2026年1月11日）